別添資料　1-1　再編前の教育体制

教育学部	札幌校	学校教員養成課程
		養護教諭養成課程
		国際理解教育課程
		芸術文化課程
		地域環境教育課程
	函館校	学校教員養成課程
		生涯教育課程
		国際理解教育課程
		芸術文化課程
		情報社会教育課程
	旭川校	学校教員養成課程
		養護教諭養成課程
		生涯教育課程
		芸術文化課程
		地域環境教育課程
	釧路校	学校教員養成課程
		生涯教育課程
		国際理解教育課程
		地域環境教育課程
	岩見沢校	学校教員養成課程
		生涯教育課程

別添資料 1-2　平成 17 年度、学生による授業評価の質問項目

＜授業評価＞

問１　この授業を通じて新しい知識や技能・考え方などを獲得することができましたか。（5 段階評価）

問２　問１で「２または１」とした人だけ答えてください。「獲得できなかった」とした理由を次の①～⑥の中から選んでマークしてください。当てはまるものならいくつ選んでもかまいません。

問３　説明の仕方などはわかりやすかったですか。（5 段階評価）

問４　問３で「２または１」とした人だけ答えてください。「わかりにくかった」とした理由を次の①～⑥の中から選んでマークしてください。当てはまるものならいくつ選んでもかまいません。

問５　板書は見やすく、よくまとめられたものでしたか。（5 段階評価）

問６　授業内容を理解するのに適切な教科書・資料・教具が用意されていましたか。（5 段階評価）

問７　授業は全体として満足できるものでしたか。（5 段階評価）

問８　問７で「２または１」とした人だけ答えてください。「満足できなかった」とした理由を次の①～⑪の中から選んでマークしてください。当てはまるものならいくつ選んでもかまいません。

＜実態調査＞

問９　この授業では学生が自分で考えたり調べたりする学習課題が授業中に出され、さらに調べたこと・考えたことに基づいて討論を行なったことがありますか。

問１０　問９で「はい」とした人だけ答えてください。その学習課題はあなたにとって興味の持てるものでしたか。

問１１　問９で「はい」とした人だけ答えてください。その討論はあなたにとって満足できるものでしたか。

問１２　問１１で「いいえ」とした人だけ答えてください。「いいえ」とした理由を次の①～⑥の中から選んでマークしてください。当てはまるものならいくつ選んでもかまいません。

問１３　授業の初めに授業計画・試験・成績評価の仕方などについて、教員から説明がありましたか。

問１４　あなたはこの授業に参加するため、次の（１）～（３）についてどのようなことをしていましたか。当てはまるものにマークしてください。

（１）　自発的な予習をして授業に臨んだ。

（２）　自発的な復習をした。

（３）　課題について……

問１５　あなたにとってこの授業の良いと思われる点及び不満と思われる点はどんなところですか。なるべく具体的に書いてください。

別添資料 1-3　平成 17 年度、学生による授業評価の実施率・回答率

（「授業の改善を目指して－学生による『授業評価アンケート』－より」

キャンパス	対象教員数	実施教員数	実施率	受講生数	回答数	回答率
札　幌	95	78	82.11%	3,175	2,412	75.97%
函　館	95	76	80.00%	2,265	1,804	79.65%
旭　川	86	77	89.53%	4,133	3,160	76.46%
釧　路	72	67	93.06%	3,492	1,080	30,93%
岩見沢	55	52	94.55%	1,684	1,017	60.39%
合　計	403	350	86.85%	14,749	9,473	64.23%

別添資料 1-4「卒業生アンケート」の質問項目

問１　本学の教養教育についてうかがいます。

(1) 教養科目（憲法、体育、外国語、等を含む）によって、次のような能力や資質が高まったと思いますか。各項目に対して「高まった」から「ほとんど高まっていない」のいずれかの番号に○をつけてください。

1. 幅広い知識や教養…… 5　4　3　2　1
2. 現代社会の諸問題や学際的テーマに対する知識…… 5　4　3　2　1
3. 人間や子どもに対する理解…… 5　4　3　2　1
4. 専門を理解するための基礎的な力…… 5　4　3　2　1
5. 北海道に関する知識や関心…… 5　4　3　2　1
6. 外国語の能力…… 5　4　3　2　1
7. パソコンなどの情報関連機器の操作…… 5　4　3　2　1
8. レポートや論文の書き方…… 5　4　3　2　1
9. 他人と議論する力…… 5　4　3　2　1
10. 自分の考えを説明したり、発表したりする力…… 5　4　3　2　1

(2) 本学で受けた教養教育は、あなたにとって満足できるものでしたか 。

5.満足している　4.ほぼ満足している　3.どちらともいえない　2.やや不満である　1.不満である

(3) 教養科目として開設してほしい、あるいはもっと充実した方がよいと思う授業がありましたら、記述してください。

問２　専門教育についてうかがいます。

(1) 本学で受けた専門教育は、あなたにとって満足できるものでしたか。

5.満足している　4.ほぼ満足している　3.どちらともいえない　2.やや不満である　1.不満である

(2) あなたが受けた専門教育（教養科目以外の授業、卒業研究、教育実習を含む）に関して、改善した方が良いと思うことがありましたら、記述してください。

問３　成績評価についてうかがいます。

あなたが受けてきた成績評価は、全般的に納得のいくものでしたか。あてはまる番号に○をつけてください。

5. ほとんどの科目で、納得のいく評価を得た
4. 納得のいく評価が多かった
3. どちらともいえない
2. 納得のいかない評価が多かった
1. ほとんどの科目で、納得のいかない評価だった

問４　シラバスと学生便覧についてうかがいます。

(1) あなたは、シラバスをどの程度利用しましたか。

4. よく利用した　3. ときどき利用した　2. あまり利用しなかった　1.まったく利用しなかった

(2) 学生便覧は、分かりやすかったですか。

4. とても分かりやすかった　3. 分かりやすかった　2. 分かりにくかった　1. とても分かりにくかった

問５　オフィスアワーについてうかがいます。

(1)　あなたはオフィスアワーを利用しましたか。オフィスアワー制度があることを知らなかった人は、「0. オフィスアワー制度を知らなかった」に○をつけて、問６に進んでください。

4. よく利用した　3. ときどき利用した　2. あまり利用しなかった　1. まったく利用しなかった

0. オフィスアワー制度を知らなかった

(2) 利用した方にうかがいます。オフィスアワーは、利用しやすかったですか。

4. とても利用しやすかった　3. 利用しやすかった　2. 利用しにくかった　1. とても利用しにくかった

(3) 利用しなかった方にうかがいます。利用しなかったのはなぜですか。

3. 必要がなかったから　　2. 利用しにくかったから　　1. その他

問６　自由学習スペースの利用についてうかがいます。

あなたは、図書館、演習室、フリースペースなどの自由学習スペースをどの程度利用しましたか。

4. よく利用した　3. ときどき利用した　2. あまり利用しなかった　1. まったく利用しなかった

問７　各種学生支援組織についてうかがいます。

次にあげる、学生支援のための大学内の組織をどの程度利用しましたか。当てはまる番号に○をつけてください。各種組織があることを知らなかった人は「0. あることを知らなかった」に○をつけてください。

1. 保健管理センター、保健管理センター分室	4	3	2	1	0
2. 学生相談室、保健管理センターの相談室(心理相談)	4	3	2	1	0
3. 就職相談室、就職情報コーナー等	4	3	2	1	0
4. 人権相談員、人権擁護委員などの人権関連組織	4	3	2	1	0
5. 指導教員	4	3	2	1	0
6. 学務グループの窓口	4	3	2	1	0
7. 学生なんでも相談室(学生なんでも相談員)	4	3	2	1	0
8. その他（具体的に書いてください：　　）	4	3	2	1	0

問８　キャリア支援、資格取得の支援体制についてうかがいます。

(1) 次にあげる、キャリア支援、資格取得等の支援をどの程度利用しましたか。
また、「4. よく利用した」「3. ときどき利用した」と答えた人は、どの程度充実していたと思いますか。

1　就職相談室・就職情報資料コーナー等の資料や情報	4　3　2　1	5　4　3　2　1
2　就職相談員・就職関係担当教職員等の支援・相談	4　3　2　1	5　4　3　2　1
3　各種資格（学芸員、社会教育主事、司書教諭、日本語教員、スポーツ指導員等）取得のための支援や対策	4　3　2　1	5　4　3　2　1
4　インターンシップや学校ボランティアなど、学外で職場体験する機会	4　3　2　1	5　4　3　2　1

(2) あなたは、どの職種に対する就職活動を中心的に行いましたか。１つ選んでください。

1. 教員　　2. 公務員等　　3. 民間企業等　　4. 大学院進学　　5. その他（　　）

(3) その就職活動を行う際に、採用試験等のための支援や対策講座などをどの程度利用しましたか。
また、「4. よく利用した」「3. ときどき利用した」と答えた人は、どの程度充実していたと思いますか。

4. よく利用した　3. ときどき利用した　2. あまり利用しなかった　1. 全く利用しなかった

5. 充実していた　4. まあまあ充実していた　3. どちらともいえない　2. あまり充実していない　1. 全く充実していない

(4) キャリア支援、資格取得等の支援は、全般的に、あなたにとって満足できるものでしたか。あてはまる番号に○をつけてください。

5. 満足している　4. ほぼ満足している　3. どちらともいえない　2. やや不満である　1. 不満である

(5) 教育職員免許状以外で、大学で取得できるように整備した方がよいと思われる資格がありましたら、記述してください。

(6) 大学のキャリア支援体制について、改善した方がよいと思われることがありましたら、記述してください。

問９　大学生活全般についてうかがいます。

(1)　全体的に考えて、あなたは本学での学生生活についてどの程度満足していますか。下記の選択肢の内からあてはまる番号に○をつけてください。

7. とても満足している

6. 満足している

5. まあまあ満足している
4. どちらともいえない
3. あまり満足していない
2. 満足していない
1. まったく満足していない

(2) その他、大学の在り方および大学生活全体を通じて何かご意見・ご提案がありましたら、記述してください。

（以下略）

別添資料　2-1　時間割例

a　札幌校

基本時間割枠（指定科目）

前期

	校時	月	火	水	木	金
1学年	1	日本国憲法A 英語ⅠABC 外コミⅠA 情報機器操作F	外コミⅠC 情報機器操作K	英語ⅠD 外コミⅠE 情報機器操作J	外コミⅠH 体育ⅠF 情報機器操作G 教育の基礎と理念A 発達と学習A	英語ⅠE 外コミⅠJ 体育ⅠJ
	2	外コミⅠB 体育ⅠA	外コミⅠD 体育ⅠB 情報機器操作AB	日本国憲法B 外コミⅠF 体育ⅠC 情報機器操作i	外コミⅠi 体育ⅠG 情報機器操作G 教育の基礎と理念B	日本国憲法C 英語ⅠFG 外コミⅠK 体育ⅠK 情報機器操作DE
	3			外コミⅠG 体育ⅠD 選択外国語	体育ⅠH	教職論
	4			体育ⅠE 選択外国語	体育Ⅰi	
	5					

後期

	校時	月	火	水	木	金
	1	英語ⅡABC 外コミⅡA	外コミⅡC	英語ⅡD 外コミⅡE	外コミⅡH 体育ⅡF 教育の基礎と理念C 発達と学習B	英語ⅡE 外コミⅡJ 体育ⅡJ
	2	外コミⅡB 体育ⅡA	外コミⅡD 体育ⅡB	外コミⅡF 体育ⅡC	外コミⅡi 体育ⅡG 教育の基礎と理念D 発達と学習C	英語ⅡFG 外コミⅡK 体育ⅡK
	3			外コミⅡG 体育ⅡD 選択外国語	体育ⅡH 道徳の指導法A 道徳の指導法B	総合演習
	4			体育ⅡE 選択外国語	体育Ⅱi 道徳の指導法C 道徳の指導法D	
	5					

	校時	月	火	水	木	金
2学年	1	小学○○		小学○○	教育の制度と社会A 学校経営と学級経営A 生徒指導・進路指導の理論と方法A 生徒指導・進路指導の理論と方法B	小学○○
	2	小学○○		小学○○	教育課程と教育方法A 教育課程と教育方法B 特別活動の指導法A 特別活動の指導法B	小学○○
	3		中学校○○教育法	中学校○○教育法		
	4		中学校○○教育法			
	5		小学生活			

	校時	月	火	水	木	金
	1	小学校○○教育法		小学校○○教育法	教育の制度と社会B 学校経営と学級経営B 生徒指導・進路指導の理論と方法C 生徒指導・進路指導の理論と方法D	小学校○○教育法
	2	小学校○○教育法		小学校○○教育法	教育課程と教育方法C 教育課程と教育方法D 特別活動の指導法C 特別活動の指導法D	小学校○○教育法
	3		中学校○○教育法	中学校○○教育法		
	4		中学校○○教育法			
	5		小学校生活科教育法			

		月	火	水	木	金
3学年	1	小学○○		小学○○	教育相談の理論と方法A 教育相談の理論と方法B	小学○○
	2	小学○○		小学○○		小学○○
	3		中学校○○教育法	中学校○○教育法		
	4					
	5					

		月	火	水	木	金
	1	小学校○○教育法		小学校○○教育法	教育相談の理論と方法C	小学校○○教育法
	2	小学校○○教育法		小学校○○教育法		小学校○○教育法
	3		高校○○教育法	高校○○教育法		
	4					
	5					

b　函館校

2007.1.23

- 専攻科目不可
- いくつかは受講可とする
- 選択科目のみ可
- 特定専攻以外可

前期

時限	学年	月	火	水	木	金
1	1	外コミ／情報／全学連携	情報／全学連携	外国語	情報（情報）	情報／教業／外コミ
	2	教業／全学連携	全学連携	外国語		教業
	3				教職論／特別活動の指導法	教育相談／生徒指導・進路指導の理論と方法
	4					
2	1	教業／全学連携	発達と学習／教育の基礎と現在／全学連携		外国語	憲法（情報、別科）
	2	教業／全学連携	全学連携		外国語	
	3	体育II	体育II	体育II	体育II	体育II
	4					
3	1			教業		憲法（地域）
	2		教育の社会と制度／教育課程と教育方法	教業	道徳の指導法	
	3			体育II		体育II
	4					
4	1					
	2					
	3					
	4					
5	1	情報（地域）		情報（国際）	教業	
	2					
	3					
	4					

後期

時限	学年	月	火	水	木	金
1	1	外コミ／全学連携	教業、全学連携	外国語	教業／障害児心理学入門	教業／外コミ
	2	全学連携	教業、全学連携	外国語	教業／障害児心理学入門	教業
	3				教職論／特別活動の指導法	教育相談／生徒指導・進路指導の理論と方法
	4					
2	1	教業、全学連携	発達と学習／教育の基礎と現在／全学連携		外国語	憲法（人間、国際）
	2	教業／全学連携／体育I	全学連携／体育I		外国語／体育I	体育I
	3					
	4					
3	1			教業		憲法（環境、国際）
	2	体育I	教育の社会と制度／教育課程と教育方法	教業／体育I	道徳の指導法	体育I
	3					
	4					
4	1					
	2					
	3				学校経営と学級経営	
	4					
5	1	教業			教業	
	2					
	3					
	4					

- 2年次以降の教職科目枠には選択科目のみ配置可とする。
- 各専攻の責任で希望学生の受講を可能にすること。
- 遅い時間の教業枠は占有枠としない。

憲法（国際）は分野で指定。

別添資料３－１　旭川校理科教育専攻履修基準表

Ⅲ－６　理科教育専攻履修基準

科目区分			科目名 1年	2年	3年	4年	単位数	
専門科目	教科指導科目	中学校教科指導法		●中学校理科教育法Ⅰ 2	●中学校理科教育法Ⅱ 2 ●中学校理科教育法Ⅲ 2	中学校理科教育法Ⅳ 2	6	56
		高等学校教科指導法				高等学校理科教育法Ⅰ 2 高等学校理科教育法Ⅱ 2		
	教科内容研究科目及び専攻科目	教科内容研究科目	●物理学概論Ⅰ 2 ●物理学概論Ⅱ 2 ●化学概論Ⅰ 2 ●化学概論Ⅱ 2 ●生物学概論Ⅰ 2 ●生物学概論Ⅱ 2 ●地学概論Ⅰ 2 ●地学概論Ⅱ 2	●基礎物理学実験 1 ●基礎化学実験 1 ●基礎生物学実験 1 ●基礎地学実験 1			20	
		専攻科目		理科情報メディア演習 1 基礎環境科学実験 1			1	25
				生物学野外実習 1 地学野外実習 1			1	
					●中学校理科実験Ⅰ 1 ●中学校理科実験Ⅱ 1 ●理科教材開発研究 2	●理科教材開発実習 1	5	
					●サイエンス特講 2		2	
				力学 2 電磁気学 2	量子力学 2 熱力学 2		14	
				有機化学 2 生物化学 2	分析化学 2 無機化学 2			
				動物分類学 2	植物分類学 2 遺伝学 2 細胞学 2			
				岩石学 2	天体物理学 2 環境地球科学 2			
				理科教育特講Ⅰ＊ 2	理科教育特講Ⅱ＊ 2			
						物理学実験Ⅰ 1 物理学実験Ⅱ 1 化学実験Ⅰ 1 化学実験Ⅱ 1 生物学実験Ⅰ 1 生物学実験Ⅱ 1 地学実験Ⅰ 1 地学実験Ⅱ 1 理科教育実験Ⅰ 1 理科教育実験Ⅱ 1	2	
						物理学演習 1 化学演習 1 生物学演習 1 地学演習 1 理科教育演習 1	1	
	卒業研究					●卒業研究 4	4	
研究発展科目（全学連携科目を含む）			学生の自主的学習プログラムに基づき選択により履修するものとする。 （対象科目）①専攻履修基準（他専攻を含む）に掲げる授業科目 ②別表「研究発展科目対象科目一覧」に掲げる授業科目 ③全学連携により開設する科目又は他の校等で開設する授業科目				10	

別添資料 3-2　平成 18～19 年度における大学教育情報システムの運用状況

（本学教育改革室作成）

(1)平成 18 年３月からＷｅｂによるシラバス登録を、４月からＷｅｂによるシラバス公開を開始した。平成 18 年４月末のシラバス入力数は 5,382 件（入力率は 78%）であり、学生は履修登録を行う際にシラバスをＷｅｂ上で閲覧することが可能となった。

同時期に開始したＷｅｂ履修登録による履修登録者数は 5,229 人（登録率は 96%）であり、リアルタイムで履修登録と登録科目の確認できるため、履修登録ミスがほとんど無くなった。

指導教員は、Ｗｅｂによる指導学生の履修登録状況の確認もできるようになった。

学生の便宜を図って、メールによる休講通知のサービスも開始した。

(2)平成 18 年８月からはＷｅｂによる採点登録を開始し、非常勤講師を除き、ほぼ全ての専任教員がＷｅｂによる採点登録を実施した。

学生はＷｅｂによる成績照会が可能となり、成績通知書の配付を待たずに、履修科目の成績確認が可能となった。

指導教員からもＷｅｂによる指導学生の成績確認が可能となり、指導学生の修学指導に必要な情報（履修・成績）をＷｅｂで確認できる体制が整った。

(3)平成 18 年 12 月には、Ｗｅｂ系のバージョンアップを行い、Ｗｅｂによるレポート等の課題管理、授業資料の配付など、授業担当教員のための支援機能も充実した。

指導学生に対する修学指導の記録を登録・管理するためのプロファイル機能を追加し、指導教員による指導学生に対するより細かな修学指導が可能となった。

(4)平成 19 年３月には、学外接続の運用を開始した。学生は、自宅からでも大学教育情報システムへのアクセスが可能となり、成績照会・履修登録・課題提出等について修学支援機能が一層向上した。

別添資料 4-1　学生表彰の状況

(1) 平成 16 年度

各校	区分	氏名・団体名	表彰理由
札幌校	個人	加藤 七星（４年）	「国際協力大学生エッセイコンテスト2003」において準特選受賞
函館校	団体	吹奏楽団	「平成16年度全日本吹奏楽コンクール」において銅賞受賞
釧路校	団体	交 響 吹 奏 楽 部	教育啓蒙及び地域貢献活動において数年来あげた顕著な成果 教育啓蒙活動 ・学校支援ボランティア ・吹奏楽教室　・音楽教室 ・ボディ・パーカッションの出張演奏と技術指導 ・ブラックライト音楽劇の出張演奏 地域貢献活動 ・公開講座への協力参加 ・根室市との相互協力協定による吹奏楽指導法講座への協力参加 ・2003年 ビザなし交流での色丹島訪問 ・2003年 くしろ霧フェスティバルでのコンサート開催協力

(2) 平成 17 年度

各校	区分	氏名・団体名	表彰理由
札幌校	個人	松尾 道行（４年）	2005年「北海道美術協会展」（道展）にて「北海道美術協会賞」を受賞
札幌校	個人	清水 香（４年）	「国際協力大学生エッセイコンテスト2004」にて入選
函館校	個人	千葉あやか（２年）	平成17年「第39回全日本剣道選手権大会」にて敢闘賞受賞
釧路校	個人	高田　章（３年）	アイスホッケー競技国内Ａ級審判員取得、インカレ他全国、全道大会に審判員として参加
函館校	団体	男子サッカー部	最近10年間、北海道大会の主要三大大会優勝２回、準優勝９回、第３位９回、全国大会北海道代表として５回出場 平成17年度北海道学生サッカーリーグフェアプレー賞受賞 その他、個人として北海道学生サッカーリーグ最優秀選手賞、ベスト・ミッドフィールダー賞などを受賞

(3) 平成 18 年度

各校	区分	氏名・団体名	表彰理由
札幌校	個人	中山真梨子（４年）	平成18年度「札幌市民芸術祭新人音楽会」にて札幌市民芸術祭奨励賞」を受賞
釧路校	個人	青木久美子（４年） 猿子　亜未（４年）	女子日本アイスホッケー代表チームのメンバーに選出。アイスホッケーの国際試合である「エアカナダカップ2007」に派遣され、日本代表として活躍
函館校	団体	モダンダンスクラブ	「全日本高校・大学ダンスフェスティバル」にて、「神戸市長賞」（第３位に相当）を受賞
釧路校	団体	剣道部（男女）	過去10年間の戦績 男子個人「全日本学生剣道選手権大会」に延べ８名の出場 男子団体「全日本学生剣道優勝大会」に２度出場 女子個人「全日本女子学生剣道選手権大会」に延べ17名の出場 女子団体「全日本女子学生剣道優勝大会」に３度出場

(4) 平成 19 年度

各校	区分	氏名・団体名	表彰内容
函館校	個人	清 田　優（４年）	○イギリスの公的な国際文化交流機関「ブリテイッシュ・カウンシル」が企画する「日本語指導助手派遣プログラム制度」において、日本全国から選考され派遣された４名の中の一員として参加 ○イギリス・リバプールの私立学校で日本語教師として採用された際、学校側から高評価を得て、当初の契約期間８か月を１年半に延長して勤務し、日本語指導や文化紹介を行う ○英語力が認められ、フイジー諸島共和国の語学学校で、アジア人向け英語授業内容のカリキュラム企画担当として採用が内定
旭川校	個人	加藤 智佳（３年）	「第 23 回ユニバーシアード冬季競技大会」（トリノ 2007.1.22）アルペン女子大回転７位 「第６回アジア冬季大会」（長春 2007.2.2）アルペン女子回転１位 「第 80 回全日本学生スキー選手権大会」（大鰐 2007.2.21）アルペン女子回転１部４位 「第 85 回全日本スキー選手権大会アルペン技術系」（長野 2007.3.7）女子アルペン大回転１位 2007.3.22 旭川市長表彰 2007.4.26 文部科学大臣表彰
旭川校	個人	佐 藤 菜 保（１年）	2007 年「第 24 回ＮＨＫ全国大学放送コンテスト」朗読部門第３位
釧路校	個人	今　竜 一（４年）	平成 19 年４月に釧路地方陸上競技協会とともに、小中学生を対象とした「釧路アスリートクラブ」を立ち上げ、指導を行う。発足当初 20 名程度だったクラブ加入者数がわずか９か月で 80 名を超え、道内最大級のクラブに成長し、全国大会出場者を輩出 平成 18・19 年度には、白糠町教育委員会より、白糠町駅伝競走大会２日間の運営・中継所役員を依頼されて大会の運営補助に当たる
釧路校	個人	豊田 真美（３年）	「第 17 回日本クラシック音楽コンクール」ピアノ部門入選
岩見沢校	個人	深 澤 春 菜（４年）	「MILD SEVEN Japan Cross Game Masters SBX 2006」第１戦（18.1.22 富良野）６位 「全日本学生スノーボード大会」(18.2.14 野辺山）スノーボードクロス優勝
岩見沢校	団体	ＦＬＡＧ	芸術課程美術コース２年次の学生５名が平成 19 年に「地域貢献活動グループ－FLAG（Free Label Art Group)」を結成し、広範囲な活動を展開 代表的な活動は「ありがとう！仮駅舎」、「かかしと町あわせプロジェクト」などで、 市民を主たる対象と位置づけたユニークな活動は、岩見沢市、岩見沢青年会議所、中心市街地商店街、ＮＰＯはまなす他との連携を深め、新聞、テレビ等で多数紹介される

別添資料 2-1

科目番号	24006	授業科目	教育哲学特別演習Ⅱ	単位	2.0
開講期	後期	曜日・時限	月曜 3 限	指導教員	羽根田　秀実
授業概要	〇授業形態 演習 〇授業の目的 日々学校において行なわれている授業。この授業の中で何が行なわれ、また、何がなされるべきなのだろうか。このようなことを私たちは、はっきりと意識して授業を行なっているのだろうか。あるいはまた、授業というものをどのように見たらよいのか、また、実践者として授業の中で何を行なうべきなのか。このような点について、記号論の立場から考えていく。 〇到達目標 ①この授業で使用した文献を正確にかつ厳密に理解することができる。 ②記号論的な思考様式を身につけ、これを応用することで、授業理解および授業改善に活用することができる。				
授業計画	1.　記号としての授業理論 2.　整合性（1） 3.　整合性（2） 4.　コード（解釈規則）（1） 5.　コード（解釈規則）（2） 6.　知識を与える 7.「知識」の構造 8.「知識」無用論 9.「知識の系統性」 10. 記号活動としての学習（1） 11. 記号活動としての学習（2） 12. ことばと経験（1） 13. ことばと経験（2） 14. 授業観・人間観 15. 授業研究における記号論の意義				
成績評価	出席状況、および学期末に課すレポートによって、総合的に評価する。				
テキスト	宇佐美寛『授業の構想と記号論』（明治図書）				
参考文献	宇佐美寛『宇佐美寛・問題意識集（1～15）』（明治図書）				
オフィス・アワー	月曜日　11:30～13:00　羽根田研究室				
備考（履修条件・受講上の注意等）	特になし				

別添資料2-2

「北海道教育大学教職大学院に関するアンケート調査」報告書

平成１９年６月

北海道教育大学では、教職大学院設置に向けて、道内教員の教職大学院に関する認知や教職大学院に対する意向を把握するため、アンケート調査を行った。

調査票は、道内にある各種学校の校長宛に依頼状を送り、校内の教員にアンケートに協力を要請、各校に3通の調査票を配布、郵送により回収した。配布した調査票は7034通、うち2391通が返送された（回収率34%）。

1　回答者の属性

今回のアンケートに応じていただいた回答者の属性は以下のとおりである。

表1　回答者の年齢および教員歴の平均

	度数	最小値	最大値	平均値	標準偏差
年齢	2383	22	60	39.04	8.991
教員歴	2367	1	38	15.79	9.045

性別では、男性が71.2%、女性が28.8%であった。

年齢は、平均で39.04歳、最小値22歳・最大値60歳のほぼ中央値となっている。教員歴をみると、最小値1年から最大値38年まで、平均は15.79年となった（表1）。回答の中には、新規採用と思われる回答者が空欄で回答している例も散見されており、比較的教員歴の浅い回答者が多くなったようである。

勤務地は、札幌市内が最多で15.7%、以下、上川管内12.2%、渡島管内9.4%と続いている（表2）。人口分布と比較すると、札幌市内および石狩管内の合計が24.3%であり、石狩管内の人口41.1%と比較して著しく低い。その他はおおむね人口に比例している。

表2　勤務地

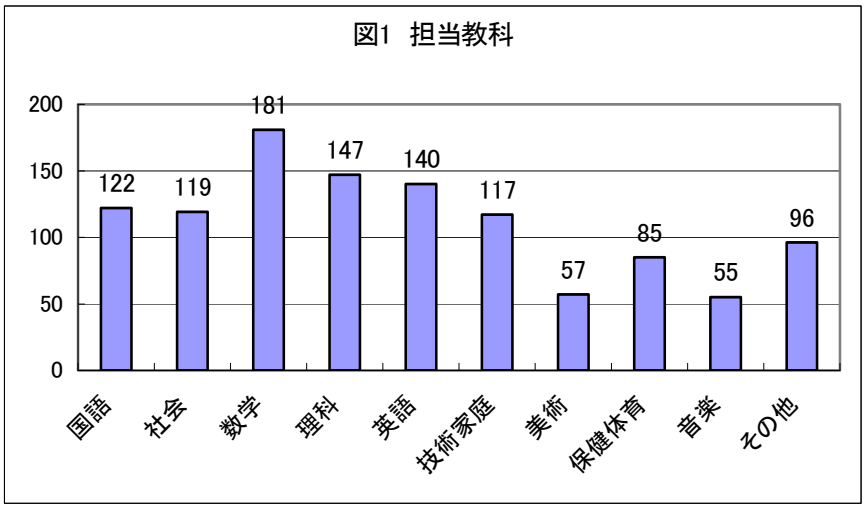
	度数	%
札幌市内	376	15.7
石狩管内	156	6.5
渡島管内	225	9.4
桧山管内	44	1.8
後志管内	116	4.9
胆振管内	171	7.2
日高管内	74	3.1
十勝管内	164	6.9
空知管内	173	7.2
上川管内	291	12.2
根室管内	75	3.1
釧路管内	171	7.2
網走管内	177	7.4
宗谷管内	107	4.5
留萌管内	69	2.9
合計	2389	100

学校種では、小学校が47.2%と約半数を占めた。以下、中学校28.8%、高等学校18.5%と続き、小中併置校が3.1%となった（表3）。その他では、養護学校・特別支援教育・盲学校・聾学校などの回答があった。

表3　学校種

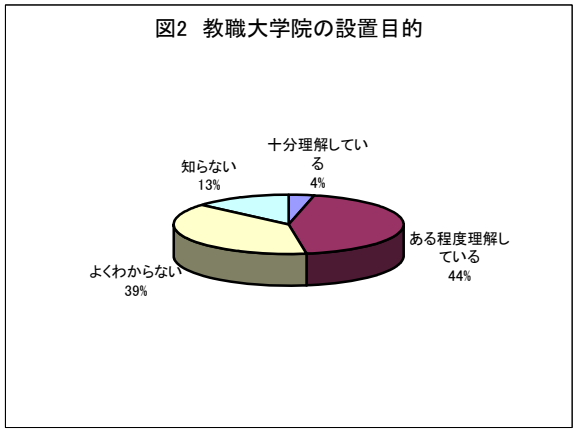
	度数	%
小学校	1128	47.2
中学校	688	28.8
小中併置	75	3.1
高等学校	443	18.5
中高併置	17	.7
その他	37	1.5
合計	2388	99.9

中学校・高等学校の教員については、科目についても回答していただいたが、結果は表4のとおりである。



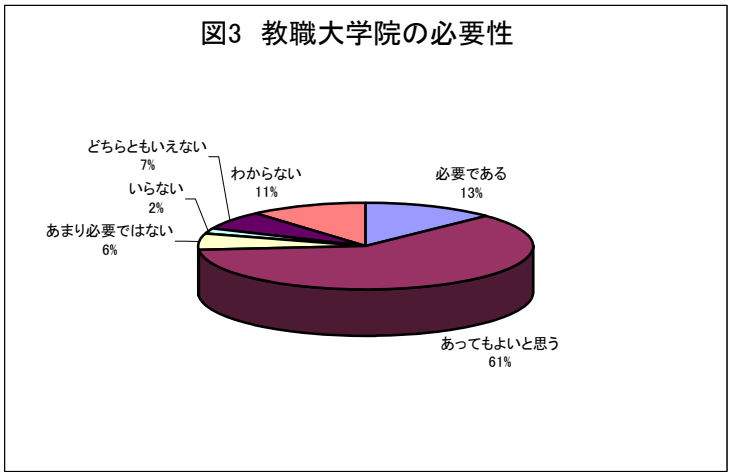
特徴的なのは、設問を複数回答としたところ、2教科の回答が散見されたことである。また、その他については、教頭・管理職といった回答が比較的多く、特殊教育・特別支援などの回答も目立った。

2　教職大学院に関する意識



まず、教職大学院に関する認知を問うた「教職大学院という言葉を知っていましたか」という設問に対しては、61%が「知っている」と回答しており、半数以上が言葉の認識を有していたという結果となった。その反面、39%は「知らなかった」と回答しており、教職大学院に関する情報提供の余地が依然として大きいことをうかがわせる結果となった。

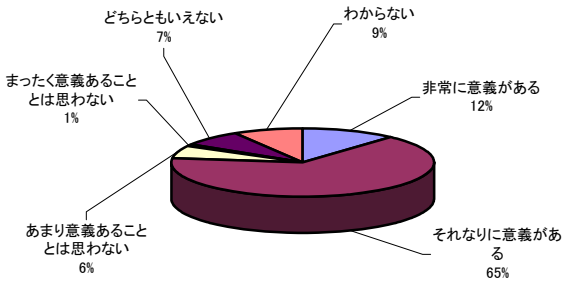
次に、「教職大学院の設置目的・役割についてご存知ですか」という設問に対しては、「十分理解している」「ある程度理解している」をあわせて 47.6%にとどまり、教職大学院が何のために設置されるのかという点については、十分な認識が広まっていないようである（図 2)。特に「十分理解している」については 3.6%であることに注目すると、北海道の教員における、教職大学院に関する認知度は高いとはいえない。したがって、よりいっそう宣伝



活動を推進することが望まれるだろう。

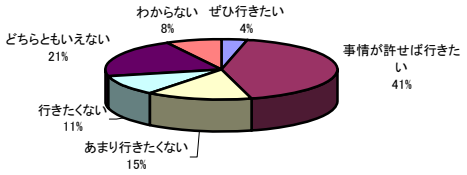
一方､｢教職大学院の必要性を感じますか」については、「必要である」12.7%、「あってもよいと思う」60.9%となり、あわせて 73.6%が好意的な回答をしている（図 3)。昨今の学校現場における種々の困難さを象徴したものとも、教員個々人のキャリアアップもしくはスキルアップへの関心の高さを示したものとも取れるが、いずれにしても、教職大学院の必要性は支持されていると考えられる。

図4 教職大学院で学ぶこと



続く「教職大学院で学ぶことは意義あることだと思いますか」という設問についても、「非常に意義がある」11.8%、「それなりに意義がある」65.1%、あわせて 76.9%と、教職大学院で学ぶことの意義を高く評価している。

図5 教職大学院への進学希望



さらに､｢あなた自身は、教職大学院に行ってみたいと思いますか」という設問に対して、「ぜひ行きたい」「事情が許せば行きたい」があわせて 45.7%となり、回答者自身の関心もそれなりにあることをうかがわせている。

これらの結果から、道内の教員における、教職大学院への期待は大きいということができよう。

3 設置のあり方について

ここでは、どのような形で教職員大学が運営されるのが望ましいと考えているかについて検討する。ここでの回答は、教職大学院への進学について肯定的な回答をした 1092 名の回答者からの回答による。

図6 実施方法

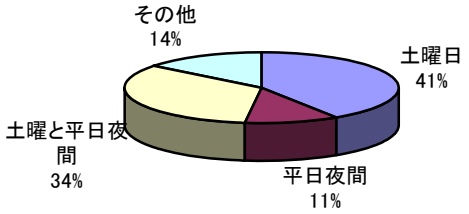
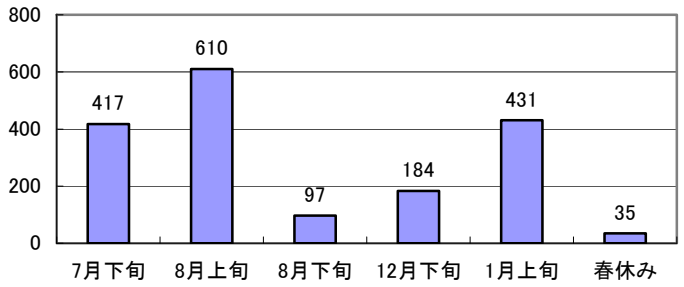


図7　望ましい集中講義期間

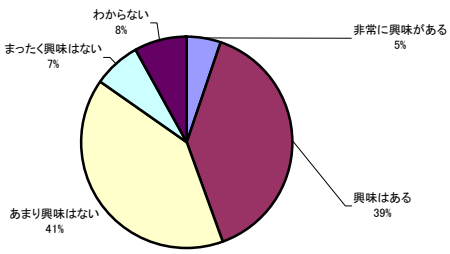


まず、実施方法については、土曜日のみが 40.9%を占め、平日と夜間の併用が 33.6%となった（図 6)。これらを考えると、回答者は、基本的に土曜日を念頭においていることが推察される。その他では、長期休暇中（夏休み・冬休み)・日祝日開講などの希望があった他、土日の夜間という回答もあった。平日昼間という回答もある程度あったが、その場合には、研修や勤務の扱いでという回答も散見された他、休業して学業に専念という回答もあった。少数ではあるが、インターネットを利用した開講という意見も存在した。

集中講義についての希望は、8 月上旬が最も多く、回答者の半数を超えている。続いて 7 月下旬・1 月上旬がほぼ同数となった。それ以外の期間では、希望者が上位 3 つの半数以下となっている（図 7)。

サテライト授業については、肯定的意見（44.7%）と否定的意見（46.9%）とが拮抗する形となった（図 8)。

図8　サテライトを利用した遠隔授業

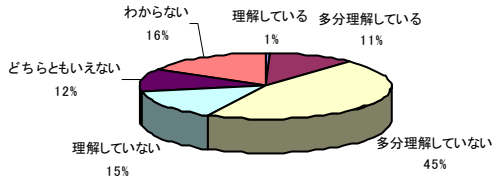


4　想定される「障害」

教職大学院への進学に対して障害となる要素はいくつか想定できる。例えば、周囲の理解の低さ、または低いであろうという危惧、あるいは個人の諸事情も障害となりえる。

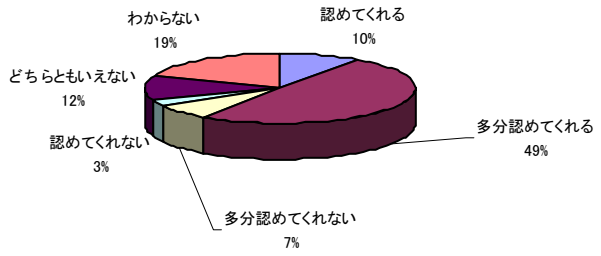
個人レベルの認知を尋ねた際には、教職大学院に関する一定の認知を確認することができた。他方、周囲がどのように見ているかということも、進学を考える際には重要な要素となりえるだろう。「周囲の人々は、教職大学院に対して理解していると思いますか」という設問では、個人レベルでの認知とは対照的な結果が出ている（図 9)。肯定的な意見が 11.7%にとどまったのに対して、「多分理解していない」が 45.8%、「理解していない」が 14.5%、あわせて 60.3%となった。この結果からはいろいろなことが想定可能だが、間違いなく言えることは、教員同士の日

図9　教職大学院に対する周囲の理解



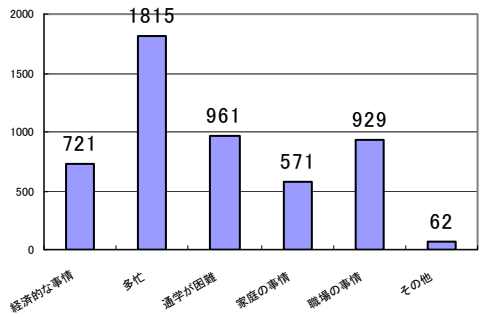
常的な会話の中に教職大学院の話題がほとんどのぼっていないということである。当然、教職大学院の経験者は皆無であるため、実態がつかみにくいという側面もあるだろう。このあたりは、教職大学院が実際にスタートすれば改善されるかもしれない。しかし他方、初期の入学者の印象がその後を大きく左右する可能性をも示唆していると考えたほうがいいだろう。

図10 上司の理解



外部環境要因としてもうひとつ考えられるのが、管理者の理解である。本人が教職大学院に行きたいと考えたとしても、管理者の理解が得られなければ進学は難しい。「仮に、あなたが教職大学院に行きたいと申し出たとして、上司は認めてくれると思いますか」という設問に対する解答は、「認めてくれる」が 9.8%、「多分認めてくれる」が 49.9%となり、6 割近い肯定的意見となった。上司の理解度の高さに対する信頼（あるいは期待）が現れる一方で、「どちらともいえない」が 11.8%、「わからない」が 18.8%となり、約 3 割は不安を抱いている（図 9）。この点は、大学側の努力だけではいかんともしがたい部分であり、教育委員会をはじめ、管理者の理解を深めていく努力も必要であると思われる。

図11 進学の障害



進学の障害については、「多忙」をあげる回答者が圧倒的に多く、全体の 4 分の 3 に達している。続いて、「通学が困難」「職場の事情」が全体の約 4 割となっている。その他の回答のほとんどは、選択肢にあげた 5 つに集約可能なものであったが、「部活・少年団との活動の両立」をあげる回答が比較的多かった。中には「保護者の理解」「育児との両立」をあげる回答もあった。

5　教職大学院に求められるもの

教職大学院に対する回答者の認知が限定的なものである限りにおいて、回答者に対して直接的に教職大学院に対してなにを期待しているのかを聞くことは、あまり意味あることとはいえない。したがって、今回の調査では、教員が重要な問

題あるいは課題と感じていると思われる事柄についての関心度を聞くことにより、また、それらに優先順位をつけてもらうことにより、現場でなにが課題になっているかを把握することで、教職大学院に対する期待を類推することとした。

まず、昨今の学校において重要であると想定される 33 の項目について、5 段階スケールで評価してもらった。その結果の一部が表 4 であるが（注：「①非常に関心がある」から「⑤まったく関心がない」までの 5 段階としたので、平均値が低いほど関心が高い）、ここからは、教員の第一の関心が指導力の充実にあるということがうかがわれる。それに続き重要視されているのが、児童・生徒に対するかかわりであるということができよう。標準偏差もほぼ比例しているため、上位になった事柄は、同時に共通性の高い課題であるということができる。

表 4　関心の高かった項目①

	平均値	標準偏差
教科等の実践的指導力	1.47	0.643
専門分野としての教科指導力	1.51	0.679
児童生徒の理解や発達	1.63	0.667
生徒指導	1.79	0.731
カウンセリング	1.93	0.863
学級経営・学年経営	1.94	0.830
保護者への対応	1.99	0.813
特別支援教育	2.00	0.902
教育相談	2.06	0.828
体験的な学習・活動	2.11	0.832

次に、先の 33 の項目から、上から順に 3 つまで優先順位をつけてもらった。その結果が表 5 である。表 4 とほぼ同じであるともいうことができるが、その一方で、平均値で均してしまった結果とは若干異なる傾向も現れている。

例えば、平均値では 8 位である「特別支援教育」が、一番関心ある事柄の 4 位に位置づけられている。特別支援教育は、個人の水準でより優先順位の高い課題であると認識されているということを示しているといえよう。同様に、平均では 11 位であった「教育課程の編成・実施・改善」が、一番関心ある事柄の 5 位となっている。教員として共有される課題が多数ある一方で、それぞれのおかれた立場で重要度が変化するようである。

いずれにしても、こうした課題に応えられる教職員大学が求められているということは確かである。更に、こうしたニーズの把握は、今後も継続的に行っていく必要があるだろう。

表 5　関心の高かった項目②

一番関心がある		二番目に関心がある		三番目に関心がある	
教科等の実践的指導力	529	専門分野としての教科指導	324	専門分野としての教科指導	162
専門分野としての教科指導	365	教科等の実践的指導力	315	教科等の実践的指導力	157
児童生徒の理解や発達	198	児童生徒の理解や発達	173	カウンセリング	149
特別支援教育	181	生徒指導	158	学級経営・学年経営	145
教育課程の編成・実施・改善	179	カウンセリング	146	生徒指導	144